期　日　二〇一七年十月七日(土)・八日(日)

会　場　山形大学

# 日本中国学会　第六十九回大会要項

日本中国学会

拝　啓

時下ますますご清祥のこととお慶び申し上げます。

さて、日本中国学会第六十九回大会を、来る十月七日（土）及び八日（日）の両日にわたり、山形大学小白川キャンパスにて開催いたします。万障お繰り合わせのうえ、ご参加くださいますよう案内申しあげます。

ご参会の方は、同封の振込用紙を使用し、必要な項目に〇印をつけ、合計振込金額をご記入のうえ、二〇一七年九月十五日（金）までにお振り込みください。消印は九月十五日までを有効とし、振替受領証をもって領収書に代えさせていただきます。振替受領証は、諸会費支払い済みの証明書として受付にてご提示いただく必要がございますので、大会参加の際にはお忘れなくご持参いただきますようお願いいたします。

敬　具

二〇一七年八月十八日

日本中国学会理事長　土田健次郎
第六十九回大会準備会代表　西上　勝

会員各位

# 日本中国学会第六十九回大会

2017年10月6日(金)～8日(日)

| 日 | 時 | 行　事 | 会　場 |
|---|---|---|---|
| 6日(金) | 13:00 | 理　事　会 | 人文社会科学部2号館第二会議室 |
| | 15:00 | 評議員会 | 人文社会科学部2号館第二会議室 |
| 7日(土) | 9:00 | 受付開始 | 基盤教育2号館エントランス |
| | 9:30 | 開　会　式 | 基盤教育2号館222教室 |
| | 10:00 | 研究発表 | (各会場) |
| | | Ⅰ.哲学・思想部会 | 第一会場　基盤教育2号館213教室 |
| | | Ⅱ.文学・語学部会 | 第二会場　基盤教育2号館222教室 |
| | | Ⅲ.日本漢文部会 | 第三会場　基盤教育2号館221教室 |
| | 11:45 | 記念撮影 | 碁盤教育2号館正面(雨天時:同ピロティ) |
| | 12:00 | 各種委員会 | 人文社会科学部1号館3階各教室 |
| | 13:30 | 研究発表 | (各会場) |
| | | Ⅰ.哲学・思想部会 | 第一会場　基盤教育2号館213教室 |
| | | Ⅱ.文学・語学部会 | 第二会場　基盤教育2号館222教室 |
| | | Ⅲ.日本漢文部会 | 第三会場　基盤教育2号館221教室 |
| | 16:00 | 総　会 | 基盤教育2号館222教室 |
| | 18:00 | 懇　親　会 | 山形国際ホテル |
| 8日(日) | 9:30 | 受付開始 | 基盤教育2号館エントランス |
| | 10:00 | 研究発表 | (各会場) |
| | | Ⅰ.哲学・思想部会 | 第一会場　基盤教育2号館213教室 |
| | | Ⅱ.文学・語学部会(1) | 第二会場　基盤教育2号館222教室 |
| | | Ⅱ.文学・語学部会(2) | 第三会場　基盤教育2号館221教室 |
| | 12:00 | 理　事　会 | 人文社会科学部2号館第2会議室 |
| | 13:00～15:00 | パネルディスカッション(次世代シンポジウム) | 第二会場　基盤教育2号館222教室 |
| | 15:00 | 閉　会　式 | 基盤教育2号館222教室 |

※　各種委員会教室

大会委員会 37演習室　出版委員会 38演習室　論文審査委員会 31演習室
研究推進・国際交流委員会 32演習室　広報委員会 33演習室
選挙管理委員会 34演習室　将来計画特別委員会 35演習室

◆学会事務局／大会準備会控室　基盤教育2号館211教室

◆休憩室　基盤教育2号館214教室

◆手荷物預かり　基盤教育2号館212教室

◆書店出版社展示・休憩室　基盤教育1号館一階東側　学生用多目的室

# 研究発表・各種委員会等の会場・時間帯一覧表

| | | 第一会場<br>Ⅰ哲学・思想部会<br>基盤教育2号館<br>213教室 | 第二会場<br>Ⅱ文学・語学部会<br>基盤教育2号館<br>222教室 | 第三会場<br>Ⅲ日本漢文部会<br>Ⅱ文学・語学部会<br>基盤教育2号館221教室 |
|---|---|---|---|---|
| 7日<br>(土) | 9:30~9:50 | 【開　会　式】　第二会場　基盤教育２号館222教室 | | |
| | 10:00~10:30 | 重信 あゆみ・董 涛(10) | 北川　直子(22) | 石丸　羽菜(37) |
| | 10:30~11:00 | 藤田　衛(12) | 乾　源俊(23) | 石橋　賢太(38) |
| | 11:00~11:30 | 早川　泉(13) | 川合　康三(24) | 廖　海華(39) |
| | 昼休 | 【記　念　撮　影】　碁盤教育２号館正面(雨天時：同ピロティ) | | |
| | | 【各 種 委 員 会】　人文社会科学部１号館３階各教室 | | |
| | 13:30~14:00 | 長谷川　隆一(14) | 静永　健(25) | 王　侃良(40) |
| | 14:00~14:30 | 望月　勇希(15) | 浅見　洋二(26) | 陳　竺慧(41) |
| | 14:30~15:00 | 三鬼　丈知(16) | 和田　英信(27) | 柯　明(42) |
| | 15:00~15:30 | 佐々木　聡(17) | 蒙　顕鵬(28) | 李　莉薇(43) |
| | 16:00~ | 【総　　会】　第二会場　基盤教育２号館222教室 | | |
| | 18:00~ | 【懇　親　会】　山形国際ホテル | | |
| 8日<br>(日) | 10:00~10:30 | 夏　雨(18) | 川島　麻衣(29) | 黄　詩琦(33) |
| | 10:30~11:00 | 新田　元規(19) | 呉　雨彤(30) | 呉　宛怡(34) |
| | 11:00~11:30 | 頼　思妤(20) | 趙　偵宇(31) | 中里見　敬(35) |
| | 11:30~12:00 | 戸井　久(21) | 上原　徳子(32) | 福長　悠(36) |
| | 12:00~13:00 | 【理　事　会】　人文社会科学部２号館第２会議室 | | |
| | 13:00~15:00 | | 【パネルディスカッション】(44)<br>次世代シンポジウム<br>○松村 茂樹・蓋 暁星・<br>徐 子怡 (○印は代表者) | |
| | 15:00~ | 【閉　会　式】　第二会場　基盤教育２号館222教室 | | |

※氏名欄の(数字)は発表要旨掲載頁

◆諸会費
- 大会参加費　2,000円
- 懇親会費　6,000円(院生 4,000円)
- 昼食弁当代　1,000円／一食
- 写真代　1,000円

◆ご案内
- キャンパス内は全面禁煙です。ご協力をお願いします。
- 大学の食堂は７日(土)のみ営業しています。キャンパス周辺の飲食店はわずかです。
- ７日の各種委員会、８日の理事会の出席者には昼食弁当が出ますので、お申し込み頂くには及びません。
- 臨時託児室のご案内は52～53頁をご覧ください。

# 日本中国学会第六十九回大会プログラム

## Ⅰ哲学思想部会　（基盤教育2号館二一三教室）

**十月七日（土）午前**

Ⅰ－1　『山海経』における図像の再現（十時～十時三十分）

重信　あゆみ（大阪府立大学）・
董　涛（大阪府立大学大学院）
司会　宇佐美　文理（京都大学）

Ⅰ－2　『荀爽九家集注』の注釈方法について（十時三十分～十一時）

藤田　衛（広島大学大学院）
司会　近藤　浩之（北海道大学）

Ⅰ－3　『京氏易伝』にみえる八宮説の思想的意義（十一時～十一時三十分）

早川　泉（東京大学大学院）
司会　近藤　浩之（北海道大学）

**十月七日（土）午後**

Ⅰ－4　『潜夫論』慎微篇から見る王符の人間観―〈賢人〉に到る前提として（十三時三十分～十四時）

長谷川　隆一（早稲田大学大学院）
司会　井ノ口　哲也（東京学芸大学）

Ⅰ－5　楊萬里「心學論」とその道学思想（十四時～十四時三十分）

望月　勇希（広島大学大学院）
司会　小島　毅（東京大学）

Ⅰ-6　道教真元派の医学知識について―李景元集解『淵源道妙洞真継篇』を中心に（十四時三十分～十五時）
三鬼　丈知（大谷大学）
司会　浦山　きか（東北大学非常勤講師）

Ⅰ-7　近世社会における発病書の受容と展開―元刊『陰陽備用選択成書』疾病門を起点として（十五時～十五時三十分）
佐々木　聡（日本学術振興会特別研究員）
司会　浦山　きか（東北大学非常勤講師）

**十月八日（日）午前**

Ⅰ-8　真実から伝説へ―羅祖の事跡とその伝説について（十時～十時三十分）　夏　雨（東京大学大学院）
司会　山下　一夫（慶應義塾大学）

Ⅰ-9　費密『弘道書』の「道統」「道脈」論における明代思想の継承（十時三十分～十一時）　新田　元規（徳島大学）
司会　伊東　貴之（国際日本文化研究センター）

Ⅰ-10　江戸時代における五嶽真形図の受容（十一時～十一時三十分）　頼　思妤（東京大学大学院）
司会　山田　利明（東洋大学）

Ⅰ-11　留学期魯迅の進化論理解と『種の起源』邦訳二種（十一時三十分～十二時）　戸井　久（埼玉大学非常勤講師）
司会　手代木　有児（福島大学）

## Ⅱ文学語学部会　（基盤教育２号館二二二教室・二二一教室）

**十月七日（土）午前**　基盤教育２号館二二二教室

Ⅱ－１　『管子』における「有司」の記述に着目して（十時～十時三十分）　北川　直子（慶應義塾大学大学院）
　　司会　谷口　洋（東京大学）

Ⅱ－２　李白文集序の詩人像（十時三十分～十一時）　乾　源俊（大谷大学）
　　司会　金　文京（鶴見大学）

Ⅱ－３　「冥捜」の詩学―杜甫から中唐詩へ（十一時～十一時三十分）　川合　康三（國學院大學）
　　司会　松原　朗（専修大学）

**十月七日（土）午後**　基盤教育２号館二二二教室

Ⅱ－４　華陽公主の面影―白楽天をめぐる永貞期の青年群像（十三時三十分～十四時）　静永　健（九州大学）
　　司会　澤崎　久和（福井大学）

Ⅱ－５　罪人の文学―蘇軾とその詩・書簡について（十四時～十四時三十分）　浅見　洋二（大阪大学）
　　司会　内山　精也（早稲田大学）

Ⅱ－６　王安石と「半山」（十四時三十分～十五時）　和田　英信（お茶の水女子大学）
　　司会　東　英寿（九州大学）

Ⅱ－７　黄庭堅の墨竹創作論について（十五時～十五時三十分）　蒙　顕鵬（九州大学大学院）
　　司会　緑川　英樹（京都大学）

**十月八日(日)午前**　**基盤教育2号館二二二教室**

Ⅱ-8　女神信仰における「靴」の表象(十時～十時三十分)
川島　麻衣(東京外国語大学大学院)
司会　牧角　悦子(二松學舍大学)

Ⅱ-9　「一様的人」というセリフ―『紅楼夢』の戯曲への改作について(十時三十分～十一時)
呉　雨彤(京都大学大学院)
司会　船越　達志(名古屋外国語大学)

Ⅱ-10　黄遵憲『日本雑事詩』における文体的特徴をめぐって(十一時～十一時三十分)　趙　偵宇(京都大学大学院)
司会　林　香奈(京都府立大学)

Ⅱ-11　近代知識人の古典小説観について―林語堂をてがかりに(十一時三十分～十二時)
上原　徳子(宮崎大学)
司会　藤井　省三(東京大学)

**十月八日(日)午前**　**基盤教育2号館二二一教室**

Ⅱ-12　一九〇六―一九一九における『留美学生月報(The Chinese Students' Monthly)』―雑誌記事にみる文化的対抗関係
(十時～十時三十分)　黄　詩琦(京都大学大学院)
司会　濱田　麻矢(神戸大学)

Ⅱ-13　女性は如何に女性を演じたか―一九一二年から一九二〇年の北京の演劇評論誌における性別と演技の批評
(十時三十分～十一時)　呉　宛怡(香港理工大学)
司会　濱田　麻矢(神戸大学)

Ⅱ－14　九州大学附属図書館濱文庫蔵の冰心『春水』手稿本について（十一時～十一時三十分）
中里見　敬（九州大学）
司会　錢　鷗（同志社大学）

Ⅱ－15　穆時英における作風の転換と堀口大學（十一時三十分～十二時）
福長　悠（東北大学大学院）
司会　白水　紀子（横浜国立大学）

## Ⅲ日本漢文部会（基盤教育2号館二二一教室）

### 十月七日（土）午前

Ⅲ－1　清原家『孝経』抄物にみえる注釈の多様性―開宗明義章「至徳要道」の注釈を例に（十時～十時三十分）
石丸　羽菜（名古屋大学大学院）
司会　水上　雅晴（中央大学）

Ⅲ－2　山鹿素行の「主静」批判―佐藤直方との比較を通して（十時三十分～十一時）
石橋　賢太（中央大学）
司会　吾妻　重二（関西大学）

Ⅲ－3　伊藤東涯の『周易伝義考異』について―その卦変説を例証として（十一時～十一時三十分）
廖　海華（北海道大学大学院）
司会　市來　津由彦（二松學舍大学）

**十月七日(土)午後**

Ⅲ-4　荻生徂徠の訓点資料における助字についての考察―「而」の訓読法を中心に(十三時三十分～十四時)
王　侃良(名古屋大学大学院)
司会　長尾　直茂(上智大学)

Ⅲ-5　野村篁園の「雅詞」について―江戸時代における填詞受容の一側面(十四時～十四時三十分)
陳　竺慧(早稲田大学大学院)
司会　詹　満江(杏林大学)

Ⅲ-6　原采蘋の漢詩における時間意識(十四時三十分～十五時)
柯　明(早稲田大学大学院)
司会　詹　満江(杏林大学)

Ⅲ-7　青木正児の京劇観(十五時～十五時三十分)
李　莉薇(華南師範大学)
司会　土屋　育子(東北大学)

**Ⅳパネルディスカッション(次世代シンポジウム)(基盤教育2号館二二二教室)**

**十月八日(日)午後**

表象文化研究の試み―中国映画研究のおもしろさ(十三時～十五時)
○松村　茂樹(大妻女子大学)
蓋　曉星(関東学院大学非常勤講師)
徐　子怡(東京理科大学非常勤講師)

## 第一部会（I哲学・思想部会）

### I－1　『山海経』における図像の再現

重信　あゆみ（大阪府立大学）・董　涛（大阪府立大学大学院）

本発表は、『山海経』に付随していたと考えられる図像の検討・再現を行うことを目的としており、『山海経図讃』研究を行っている董涛氏との共同発表である。

『山海経』は古代中国の神話的地理書である。そこにはふしぎな姿形をした神や動植物が記される。そこにはもと図があった。清の郝懿行は『山海経箋疏』の中で図の存在について言及している。

明刊覆宋本である大阪府立中央図書館所蔵の『山海経』に付されている図は、明代に文章から描きおこしたもので、『山海経』成立当初のものとは隔たりがある可能性が高い。

本研究では現存する『山海経』の版本及び図を比較検討する。そののち帛画・壁画・画像石などの図像的資料を精査することで『山海経』成立当初の図を出来うる限り再現する。

底本は新出資料の故宮博物院所蔵曹善本（元）を使用する。このことは、『山海経』研究にとって画期的なものであると考える。

本発表では西王母図像の再現を行う。『山海経』では西王母は「豹尾虎歯、蓬髪戴勝」とみえる。後漢早期の画像石に「田王母」と刻される図像がある。（図1）これまで「田」と読まれているが、隷書の「西」には「田」に近い字形があり、「西王母」であろう。歯がギザギザで、ヒゲがあり、頭にはかんざし付きの冠が描かれる。この図像は「豹尾虎歯、蓬髪戴勝」という『山海経』の記述に最も近い姿といえるであろう。男の蓋然性が高い。ここには美しい西王母の姿はない。元、趙道一『歴世真仙体道通鑑後集』には「天姿奄靄、靈顔絶世、眞靈人也」と記載される。同時代の永楽宮三清殿西壁壁画に描かれた西王母は美しく気品がある。西王母は九霊

太妙亀山金母、太霊九光亀台金母と呼ばれ、現在でも中国や台湾においては王母娘娘として知られている。いずれも、女性である。

明、王崇慶『山海経釈義』（図２）や清、汪紱『山海経存』（図３）に載せられている西王母図像が「豹尾虎歯、蓬髪戴勝」を表現したものであるかについては検討の余地がある。

（図１）

（図２）

（図３）

## Ⅰ－2　『荀爽九家集注』の注釈方法について

藤田　衛（広島大学大学院）

『荀爽九家集注』（以下、『九家易』）は、『経典釈文』序録によると、荀爽・京房・馬融・鄭玄・宋衷・虞翻・陸績・姚信・翟子玄の九人の『易』の集注である。その内、荀爽が主とされることから「荀爽」と冠せられているとする。しかしながら、その作者・成立時期はともに審らかでない。『九家易』はすでに散逸しており、明・王謨『九家易解』、孫堂『九家周易集注』、清・黄奭『九家易集注』、徐芹庭「《周易旬爽九家集注》闡微」（『漢易闡微　上下』（中国書店、二〇一〇）第十六章「《荀九家易》」）といった輯本がある。これら『九家易』の輯佚書は大同小異であり、その九割方は唐・李鼎祚『周易集解』からに拠っている。

本発表で取り上げるのは、『九家易』の注釈方法である。『九家易』は九人の易注の集積というが、何晏の『論語集解』のような注釈の寄せ集めであったのか、それともそれとは異なる形式を持っていたのかが問題となる。徐芹庭は、『漢易闡微　下』にて、『九家易』と九人の諸注とを比較し一致する部分を指摘するものの、どのような注釈だったのかまでは論じていない。また、張恵言『周易荀氏九家』は荀爽易注と『九家易』と合わせて論じ、徐芹庭は『九家易』によって荀爽易注を補完することができると述べるように、『九家易』は荀爽易注の影響に重きを置かれ論じられてきた。しかし、『九家注』が九人の集注である以上、荀爽ばかりに焦点を当てることが妥当なものか再検討を要するように思われる。

そこで、『九家易』と九人の易注との比較を通して、『九家易』の注釈方法を明らかにする。そして『九家易』は、荀爽易注を中核としながらも、編者の見解を交えながら九人の易注を統合し、一つの注に再構築したものであったことを証明したい。

## Ⅰ－3　『京氏易伝』にみえる八宮説の思想的意義

早川　泉（東京大学大学院）

先秦の諸子百家の時代に始まる官界の思想闘争は前後漢の間に儒学優勢が決定的となるが、その儒学の経典中でも最高の価値を認められたのが占書『周易』であったといわれる。当時主流の易学は卦象と数の解釈を強調することから、後世の義理易に対して象数易と称される。象数易は様々の占筮理論を発展させたことでも知られるが、その構造の難解さゆえに未解明の部分も多い。

発表者は論文「飛伏説からみる『京氏易伝』の八宮構造」（『中国哲学研究』第二十九号）において、象数易を代表する前漢の易学者京房の『京氏易伝』中の占筮理論のひとつである「飛伏」に注目した。この理論はしばしば、六爻の陰陽が全て異なるふたつの六十四卦を「飛」と「伏」の組にするものだと考えられていたが、当該論文での検討によりこれはふたつの三爻八卦を組にした着想であることが明らかとなる。さらにこの分析から、『京氏易伝』全体を支える独自の六十四卦構造「八宮」が、孟喜の十二消息の単なる模倣ではなく、「八卦」の「正性」の衰亡を描くという京房の独創を含んだものであることが示唆された。八宮は通行本『周易』の卦序に対して全く新しい卦序を提起するものであるから、この含意は京房にとって軽からぬものであったと考えられる。

本発表では、以上のような『京氏易伝』の八宮構造の、それ以降の易学における継承と発展について、『周易集解』や『隋書』五行志などに残る後漢・魏晋南北朝諸家の説を材料に検討し、後世に影響を与えたとされる京房の易説の中でも中核的発想と目されるこの説の思想的意義を考察したい。

## Ⅰ－4　『潜夫論』慎微篇から見る王符の人間観―〈賢人〉に到る前提として

長谷川　隆一（早稲田大学大学院）

王符は、夙に侯外廬氏・馮友蘭氏が指摘するように、一方で従来の天人観を承認しながらも、人為を強調している。それは、日原利国氏・金谷治氏・田中麻紗巳氏も同様の理解であり、近年では渡部東一郎氏が、『尚書』皐陶謨の「天工人其代之」を王符が多用していることに着目し、人為の強調に対する理論的な根拠を与えている。つまり、王符が〈人為〉ということを非常に重要視していることについては、ほぼ一致している理解といってよい。

王符が〈人為〉を重要視していたこと、上の如くであるが、後漢時代には一般的な考えとされる〈性三品説〉と〈人為〉の重視を重ね合わせると、なお乗り越えなければならない問題が存在する。それは、〈性三品説〉が厳格に適用されているのか、否か、である。本報告では、これを踏まえたうえで、『潜夫論』慎微篇を主たる対象として、検討を行う。特に慎微篇で重要である記述は、「布衣有り善を積むこと怠らざれば、必ず顔、閔の賢に致し、悪を積むこと休まざれば、必ず桀、跖の名に致す」という箇所であり、これについては、二つの見解が存在する。田中麻紗巳氏は、『潜夫論』において〈性三品説〉は確かに適用されているが、当該の記述こそが、王符の人間観の根幹を成すと見、多分に留保は設けながらも、〈性三品説〉を前提と考えない。対して日原利国氏は、王符は〈性三品説〉を厳格に適用していたと認識し、当該の記述を、中庸の民のみに適用されるものとする。

上記を踏まえた上で、本報告では、慎微篇の記述・先行研究を手がかりに王符の人間観を検討し、それと彼の〈賢人〉修養との関わり、そして、彼の直面していた〈現実〉との連関について考察することを目的とする。さすれば、彼の〈現実〉に規定された立体的な人間観が明らかになろう。

## Ⅰ－5　楊萬里「心學論」とその道学思想

望月　勇希（広島大学大学院）

南宋を代表する詩人として名高い楊萬里（一一二七～一二〇六）は、朱熹、陸九淵らと同じく、北宋の程子および程門に発する道学思想の展開としての一面も持っていた。しかし、『誠齋易伝』の易学を除いて、その思想については従来あまり検討対象とされていない。そこで、道学思想家としての一面を持つこの楊萬里の像に迫るべく、発表者は先に、「楊萬里心學思想研究序説―「中庸」の解釈を中心として―」（『東洋古典學研究』第四十二集）を発表し、「中庸」の「未発已発」についての彼の議論や性善説などについて、初歩的に検討した。

本発表は、楊萬里の学問観や心性論が、比較的まとまった形で述べられている「心學論」三巻（四部叢刊本『誠齋集』巻八四～八六所収）の全体的検討を通じて、彼が南宋前期という時代、どのような関心を持ちながら議論を行い、どのような思想傾向を持っていたのかについて考察するものである。

今回は、「心學論」における議論の内容を紹介した上で、経書や聖人について、どのような思索を楊萬里が展開していたかについて言及する。経書に込められた聖人の「道」と、経書の言葉の関係。顔回、曽子といった「道」を体得した人びとの境涯のあり方。さらには、「心」の本来的性格と、それに基づく工夫論。「心學論」において述べられているこれらの課題を、楊萬里の感覚に寄り添いながら分析することを通じて、どのような学びを楊萬里が志向していたのかを明らかにしたい。同時に、そこから見えてくる「心學論」の思想史的位置を考察することによって、南宋前期における、道学思想家としての楊萬里の像を探究したいと考えている。

## Ⅰ-6　道教真元派の医学知識について―李景元集解『淵源道妙洞真継篇』を中心に

三鬼　丈知（大谷大学）

『淵源道妙洞真継篇』（『道蔵』太玄部、以下『妙真継篇』）は、「真元門生李景元集解」と題されており、道教の上方真元派の経典に李景元という人物が注解を付したものである。その上中巻には、天地と気候の巡り及び人体五臓六腑などとの相関が説かれ、下巻では「盧氏」による臓腑解剖の説を述べ、さらに内丹術にも説き及んでおり、全般にわたって多くの医学知識が引用されている。

上方真元派がどのような教派であったかは、王卡氏の研究によってかなり明らかになっている。王氏によれば、この道教教派は、「上方天尊」を主神として奉じ、「上方四経」を伝習し、「真元の道」について修業し、「真元雲篆」という符籙の術を行う一派であるという。

上方真元派の経典には、「上方四経」に加え、さらに三種の経典があり、あわせて七種の経典が伝えられたらしい。元好問『通仙観記』などの記載から、これら経典の成立は金末元初のころであり、河南省王屋山の道士によって編纂されたものと推定されている。李景元は、戊辰の年（一二六八年か）にこれら七種の経典を師より授かり、そのうちの一つ『妙真経』に注解を加えたものが『妙真継篇』であると考えられる。

上方真元派の経典が世に出たとみられる金末元初のころといえば、中国医学においては、臓腑経絡理論の発展や、運気論に基づいた新理論による医学が興隆していた。『妙真継篇』上中巻の医学知識の多くは、『聖済総録』（一一一二年）から引用されているが、『聖済総録』は、運気論を重視したことで知られる。『妙真継篇』も運気論など新理論の影響を受けたはずであるが、直接的な影響よりもむしろ、独自の宇宙観・身体観が示されており注目に値する。例えば、天象に黄道十二宮を用いることは、道教文献の中でも特異なものであろう。この書を通して、当時の医学と道教とのあいだでどのような関連が見られるか、考察を試みたい。

## Ⅰ－7　近世社会における発病書の受容と展開―元刊『陰陽備用選択成書』疾病門を起点として

佐々木　聡（日本学術振興会特別研究員）

「発病書」とは、占病、すなわち陰陽・五行・干支・建除などに基づき病気を占う術を詳解した書物である。占病に関する文献には、通俗医療と道教、および占術が結びついた内容が豊富に見られ、その背景にある辟邪信仰や鬼神観を考える上でも重要な資料である。

従来、占病の研究は、敦煌文献、特に「発病書」の題を持つP.2589を起点として行われてきた。代表的な研究としては、劉永明「敦煌道教的世俗化之路―敦煌《発病書》研究」（『敦煌学輯刊』二〇〇六年第一期）や最近刊行された陳于柱『敦煌吐魯番出土発病書整理研究』（科学出版社、二〇一六年）が挙げられる。特に後者は、非漢文文献を含む発病書の網羅的な整理研究であり、陳氏により敦煌・吐魯番における占病の実態は、かなり明らかになったと言える。

その一方で、後世の発病書については研究がほとんどない。たとえば陳于柱氏は、該当する書名が歴代の目録に見えないために、中国の学界では、発病書が前近代において広く流行していたことを疑問視する向きがあることを述べている（前掲書二六頁）。

しかし、実際には発病書の内容の多くは日用類書に継承されており、明末に出版された『万用正宗』や『万宝全書』などに設けられた「法病門」には、敦煌の発病書とよく似た内容が見える。もっとも敦煌写本と日用類書の間には、時代的・地域的な隔たりがかなりある。そこで注目するのが、広島市立図書館浅野文庫に所蔵される『陰陽備用選択成書』である。この書物は最近、磯部彰『広島市立図書館蔵浅野文庫漢籍図録』（東北アジア研究センター、二〇一五年）で紹介されたが、これまで殆ど知られていなかった。近年、報告者が磯部氏の紹介を受けて本書の調査をしたところ、その中に発病書や法病門とよく似た「疾病門」が含まれることに気づいた。本報告では、この疾病門を起点として近世における発病書の受容について考えてみたい。

## Ⅰ－8　真実から伝説へ―羅祖の事跡とその伝説について

夏　雨（東京大学大学院）

本発表の研究対象は羅祖の事跡とその伝説についてである。羅祖が創立した羅教は明清に亘って広く流伝した。分派の一つである水手羅教の組織は、青幇の前身であった。

羅祖の事跡は主に羅教の経典『開心法要』版〈五部六冊〉中の『苦功悟道卷』にある『祖師行脚十字恩情妙頌』に記載されている。その他、役人の題奏や僧侶の筆記等にも断片的な記載がある。羅教分派の斎教の経典『三祖行脚因由宝卷』や青幇の幇会手冊にも、羅祖に関する伝説が記載されている。比較的成書が早い『苦功悟道卷』の中では羅祖は史実に近い形で描かれており、一方で比較的成書が遅い資料では羅祖が神格化され、その事跡も奇蹟として祭り上げられ、伝説が形成されていく。

これまでの研究で、多くの学者は羅祖の伝説を余り重視しなかった。これらの文書の分析で、羅祖伝説形成の起源やその影響を遡及することができ、また彼らが教団を構築した歴史の一端を垣間見ることができると報告者は考えている。

本発表の内容は三部分で構成される。第一部は羅祖の事跡である。この部では、報告者は羅祖と羅教について簡単な紹介を行うとともに、『苦功悟道卷』、役人の題奏、僧侶の筆記等の資料を用いて史実に近い形で描かれた羅祖の事跡を比較分析していく。第二部は後世の羅祖伝説である。報告者は、『三祖行脚因由宝卷』及び幾つかの青幇会手冊に見られる、幇会が自らの起源について述べている部分を比べ、史実と照らし合わせて、仏教と道教の影響、演義小説化、政府に親和的な立場を取る等の特徴をまとめる。とりわけ指摘すべきは、羅祖伝説の一部の経緯が馮夢龍の『警世通言』にある『李謫仙醉草嚇蛮書』の話と非常に類似している点であり、報告者はこれを比較検討する。第三部は結論である。報告者は羅祖伝説のプロット、叙述方式等の特徴を分析することで、羅教信者たちが開祖を自らどのように認識し、そしてその意識が構築された原因を探求したい。

## Ⅰ－9　費密『弘道書』の「道統」「道脈」論における明代思想の継承

新田　元規（徳島大学）

明末清初の人、費密（一六二五―一七〇一）は、その著書『弘道書』において、いわゆる「道統」についての独自説を打ち出したことで知られる。費密によれば、「道」の内実は、「正しい心のあり方」ではなく、「治平を実現するための政教・礼楽」であり、その主な担い手は、師儒ではなく、現に統治にあたる君主である。歴代の君主が「道」の実現者として「道統」を形成する一方で、聖門以来の儒者は、下にあって経書を保存し、「道」の伝承者として「道脈」を形成してきたのであった。本報告では、「道」の内実と担い手をめぐる費密の独自説について、次の二点を検討する。

検討の第一点は、明代中後期から清代前期に活性化した「道統」をめぐる議論との関係である。この時期、陽明後学と批判者の間では、道統を継承した師儒の顔ぶれや、道の担い手を儒者に求めるか君主に求めるかといった問題をめぐっての議論が行われており、また、各種の学統論も盛んに著された。これら同時代の動向と、費密の「道統」「道脈」二元論との関係・異同を探る。

検討の第二点は、費密が明示的に参照している明人の所説との影響関係である。「道統」「道脈」二元論は独自性が高いものに思えるが、費密当人は、むしろ、自説の画期性を抑え気味に評価し、自身の所説があくまで明代までの諸儒の説を継承するものであると主張する。費密は、実際に、自説の先蹤にあたる明人の言説を豊富に挙げ、そこには、宋学の道統論への批判が、明代から伏流として存在していたかに描き出されている。明人の所説が、費密に及ぼしている実質の影響がどの程度であるかを、費密自身が影響関係を仮構している面があることも想定しながら、改めて検討する。

## I－10　江戸時代における五嶽真形図の受容

頼　思好（東京大学大学院）

本報告は、五嶽真形図が日本の江戸時代において如何に受容されたのかという問題について基礎的な考察を試みるものである。五嶽真形図とは道教の代表的な護符の一つであり、五方の五嶽それぞれを意味・代表する五つの図によって構成された一組の図形である。現在「五嶽真形図」と称されるものには地図式五嶽真形図と唐鏡系五嶽真形図という概ね二種類の様式があり、どちらも日本に伝わった。

徳川光圀はかつて五嶽真形図を自身の花押の原型として採用した。また、発表者は徳川光圀と親しい関係にあった渡来僧、東皐心越が残した五嶽真形図にも注目している。支配階級の徳川光圀が道教の図を、自らを象徴する花押に使用したことにはどのような意味があったのか。こうした問題を解読する前の基礎作業として、報告者が現在収集した版本資料から、徳川光圀が使用した図像が唐鏡系五嶽真形図であるということを指摘したい。

さらに、徳川光圀の花押のほかに、江戸時代の旅行文化において、唐鏡系五嶽真形図が御利益のあるお守りとして実際に利用されていた事実についても検討したい。唐鏡系五嶽真形図は旅行安全のための護身符として、道教の登渉術が東アジアに伝播し影響した最もよい例となった。これは非常に意義深い。このような観点のもと、現在見つかった八隅盧菴『旅行用心集』及びフランス国家図書館蔵の東海道・中山道里程表等の文献資料を対象としてこれに考察を加えてみたい。

近世東アジア交流史における道教思想伝播の様相の全貌を明らかにすることは未だ難しい状況にあるが、報告者は、こうした具体的な史実・文献を例として、江戸時代における道教思想文化の受容の一端を明らかにしたい。

## Ⅰ－11　留学期魯迅の進化論理解と『種の起源』邦訳二種

戸井　久（埼玉大学非常勤講師）

留学期魯迅の進化論理解とは、まず来日以前の厳復訳『天演論』との出会いに始まり、次いで留学後の丘浅次郎『進化論講話』（一九〇四年）に代表される日本の進化論書によって「真に魯迅にダーウィンの進化論を理解せしめた」（李冬木）と考えられている。当時の多くの中国知識人がスペンサー流の社会進化論に深く傾倒する中で、魯迅が日本の進化論書を通して真正面から生物進化論と向き合っていたことは、かれの進化論理解の興味深い特徴である。それにも関わらず、先行研究では中島長文、李冬木両氏を除いてほとんど取り上げられておらず、研究課題として十分に解明されているとは言い難い。

この問題を探るべく、報告者はこれまで指摘されてきた明治日本の進化論書に加えて、さらに以下に示すダーウィン『種の起源』（The Origin of Species）邦訳二種の存在に注目する。

①チャーレス・ダーヰン 著・立花銑三郎訳『生物始原 一名種源論』（経済雑誌社、一八九六年）
②チャーレス・ダーウイン 著・丘浅次郎訳文校訂・東京開成館訳『種の起源 生存競争適者生存の原理』（東京開成館、一九〇五年）

本報告では、まず魯迅がこの二冊を読んだと考えられる理由を明らかにし、あわせて二冊の内容を比較検討する。次いで②で用いられた「適応」という概念に注目し、これが一九〇七年の魯迅作「人之歴史」に与えた影響について考察する。「適応」とは、生物学・生理学の領域で今日も一般的に使われている学術用語であるが、明治期の日本の学術界では「順応」等の語も多く用いられていた。事実、魯迅が「人之歴史」の中で「適応」とした箇所は、種本となった日本の進化論書ではすべて「順応」となっている。報告者は魯迅が「適応」の語を選択した理由を探るとともに、「人之歴史」におけるこの語の使われ方を分析することで、留学期魯迅の生物進化論の理解の一端を提示したいと考えている。

## Ⅱ－1　『管子』における「有司」の記述に着目して

北川　直子（慶應義塾大学大学院）

中国の古典籍には、「有司」という語がしばしば現れる。通常「役人」と訳され、特定の官職名ではない。この語は、古くは毛公鼎などの西周青銅器の銘文に參有辭（つくりは司）として見られ、張亜初・劉雨『西周金文官制研究』（二〇〇四）では、これを伝世文献における三有司であり、司徒・司馬・司空であるとする。

しかし、こうした西周期の官制の表現が、春秋戦国期以降の文献に現れる「有司」と同じ意味をもつとは考えにくい。むしろ、同じ「有司」という語が使われていても、異なる時代・異なる撰者によって、その言葉に含まれる意味に違いが生じると考えられる。

そこで、春秋戦国期の文献を中心として、『論語』『老子』『荘子』『墨子』『孟子』『韓非子』『管子』『国語』『戦国策』『春秋左氏伝』『呂氏春秋』『淮南子』などにおける「有司」の出現件数を調べたところ、『管子』と『淮南子』に多く、またその出現傾向にも、ある特徴がみられた。同様の調査を、やはり「役人」や「吏卒」などと訳されることの多い、「吏」という語についても調べたところ、「吏」では「有司」とは異なる結果を得た。このことは、「有司」と「吏」という語が、同じように「役人」と訳されても、その語に含まれる意味が異なることを示している。

そこで本発表では、こうした傾向を踏まえた上で、「有司」という語が多くみられた『管子』の「有司」記述について考察を行う。

『管子』は、民国期の劉節が指摘するように、その内容は複雑で、管子の手によるものではないことは、既に南宋時代の葉水心の言に見られる。またそれが、一時代に作成されたものではないことも、先学によって指摘されている（「『管子』中所見之宋鈃一派學說」『劉節文集』中山大学出版社、二〇〇四所収）。『管子』の研究は、主に思想面からなされることが多いが、本発表では、有司という語の出現傾向と用法から、『管子』の分析を試みる。

## Ⅱ－2　李白文集序の詩人像

乾　源俊（大谷大学）

ひとくちに詩人像と言っても、さまざまな要素を含みうる。詩文から感受される書き手の個性やひととなり、本人の身上にかかる個別具体的な事情、あるいは外見的特徴、等等。また詩作品を読んだときに読者のなかに喚起される書き手の像であるという意味においては、読みこみの度合によって、情報の取捨によって多様な偏差を生じうる。一方でそれとは別に、作者本人が示そうとする自身の像がある。われわれが書き手の像を思い浮かべやすい詩人として、李白のほかにも、先には陶淵明、同時代には杜甫が思いあたる。その理由のひとつに、彼ら自身が自己像のプロデュース能力に秀でていたということがあるのではないか。そのように捉えて、まずは「彼自身による李白像」を対象として考察を行うこととする。それは詩作品、文集序における自伝的な記述、自身の呼称をめぐるエピソード等、さまざまなレベルにおいて見られる。それらは詩人本人から出ていることからすれば、当人にかかるなにがしかの真実を映している。とはいえ、映像とは現実からなにがしかを差し引いたものであるということからすれば、真実そのものではない。いわば虚と実のあわいに結ぶ像である。詩人の示した像は、ひとまず受け手のなかでおなじ像を結んだとしても、そこに含まれる虚実真偽をめぐって、際限のない探索が新たに始まる。こうした事情は、李白文集序の記述をめぐる論説によくあらわれる。李白の文集は生前に二種が編まれ序が遺る。魏顥「李翰林集序」（上元二761）と李陽冰「草堂集序」（宝応元762）である。いずれも李白本人の出自、文学の評価、宮廷に召された経緯、文集編纂の過程などが順を追って書かれる。これらにおける詩人像を比較吟味し、とくに後者において、われわれが作品から得ている李白像とはやや異なった、特殊な詩人像が描かれていること、その理由と意味について考察してみたい。

## Ⅱ－3　「冥捜」の詩学―杜甫から中唐詩へ

川合　康三（國學院大學）

杜甫の詩が外界を描く時、その特徴の一つに、新たな視点で現実を切り取って提示する表現がある。ことに小動物の様態に対して、独特の切り口でその瞬間を捉える。

無數蜻蜓齊上下　無数の蜻蜓は斉しく上下し
一雙鸂鶒對沈浮　一双の鸂鶒は対して沈浮す　（「居を卜す」）

日常のなかの何気ない一場面ではあるが、言われてみて初めてそんな光景があったと気づかされる。実際の光景であっても、それまでは言葉にされることも、目に留めることもなかった、現実の新たな断面を捉えたものだ。

杜甫には一方でまた現実を越えた世界を描き出す表現がある。それは杜甫の言う「冥捜」に相当する。見える物の向こうを探ろうとするのである。

七星在北戸　七星　北戸に在り
河漢聲西流　河漢　声　西に流る　（「諸公の慈恩寺の塔に登るに同ず」）

「冥捜」の語のよく知られた早い例は、晋・孫綽「天台山の賦」序の「遠く寄せて冥に捜る」に見られる。そこでは「五嶽にも列せられざる」ほどに超絶した空間、神霊の住まう神秘の世界に分け入ることを言う。盛唐になると、杜甫やその周辺の高適らによって、日常を越えた世界にまで言語を駆使して追求する詩作について、とりわけ他者の詩作を讃える文脈のなかで用いられるようになる。

杜甫を賞賛する元稹・白居易・韓愈は、杜甫の何を讃えるか、それぞれに異なるが、韓愈が取り上げるのは、杜甫の表現が造物主に拮抗するまでに世界を創造する点であった。そして韓愈が自分たちの関係を李杜になぞらえた孟郊についても、「冥観　古今を洞ち、象外　幽好を逐う」（「士を薦む」詩）と、孟郊が杜甫の「冥捜」に連続することを指摘する。また韓門の一人に数えられる李賀の詩は周知のように現象を越えた世界を描き出す。杜甫の詩は様々な面で中唐詩に継承されていくが、ここでは「冥捜」が韓愈を媒介として孟郊や李賀に流れ、さらに展開されてゆく様相を追ってみたい。

## Ⅱ－4　華陽公主の面影―白楽天をめぐる永貞期の青年群像

静永　健（九州大学）

標題の女性は、唐の代宗皇帝李豫（七二六～七七九、在位七六二～七七九、第十一代）の第五女で、本名不詳、生年も定かではない。その聡明さは父帝も大いに嘉するところであったが、生来の病弱ゆえに、大暦七年（七七二）宮殿を出て入道し、都城内の永崇坊に療養した。しかし、不幸にも大暦九年（七七四）に薨去。以後その居宅は、公主の封号を取って華陽観と称された。

さて、公主薨去三十一年後の永貞元年（八〇五）、翌春予定の制科に応じるため白居易と元稹が共にこの道観に数ヶ月寄宿し、いわゆる受験勉強に励んだ。このことは『白氏文集』（那波本）巻四十五冒頭の「策林序」に記されるほか、白氏には「永崇里観居」詩（巻五）や「春題華陽観」詩（巻十三）など幾つかの作品にそのようすが綴られている。二人は、その猛勉強の合間、ここで多くの友人たちと交遊した。いま確実視される名を挙げると、李紳、李諒、盧周諒、韋八（名未詳）、そして牛僧孺もその一人である。折しも、朝廷内は順宗皇帝李誦（七六一～八〇六、在位は八〇五年の一月から八月初旬まで、第十三代）から次の憲宗皇帝李純（七七八～八二〇、即位は八〇五年八月、第十四代）への急激な政権交代期に当たり、白居易たち若い士大夫たちを大いに刺激していたようである。加えて、白氏「春題華陽観」詩の自注によれば、観には「旧内人の存する有り」とのことで、仮寓中の彼らは、その女性から往時の宮殿内（つまり後宮）でのさまざまな軼事を耳にしていたようである。

従来、元稹・白居易の生涯を語る上では、いまだ「序幕」に過ぎぬためか、大きく取り上げられることの少ない一年余であるが、白居易たち元和期に活躍する詩人たちの何がしか出発点とでも言うべき情景が想像される場所でもあり、少ない資料を駆使して、いささか発表者なりの考察を加えたいと思う。

## Ⅱ－5　罪人の文学―蘇軾とその詩・書簡について

浅見　洋二（大阪大学）

中国の文学史をふりかえってみると、罪に問われた者がきわめて数多く存在することに気づかされる。問われた罪のほとんどは官界の権力闘争によるものであり、なかには冤罪も多く含まれていただろうが、結果として少なからぬ文人が投獄された。左遷・貶謫されたケースに至っては枚挙にいとまない。たとえば、屈原、司馬遷、曹植、嵇康、陸機、謝霊運、江淹、駱賓王、李白、韓愈、柳宗元など。中国文学史は、さながら「罪人の文学史」の様相を呈している。ここに取りあげる北宋の蘇軾もまた、その典型的なひとりである。

蘇軾は、その言論が朝廷誹謗の罪に問われて投獄され、そして貶謫された。かかる境遇にあった蘇軾は、自らを罪人として意識していた。その詩は折に触れて自らを「楚囚」と呼び、書簡（尺牘）は繰り返し自らが犯した「罪」に言い及んでいる。蘇軾の文学活動のほとんどは、罪人としての自覚のもとに行われていたと言っていいだろう。

罪人であることを自覚する蘇軾は、作品を公（おおやけ）の場にはなるべく出さぬよう心がけていた。これは罪に問われた者の処世のあり方として、古くから見られたものである。しかし、その一方で親しい友との間では詩や書簡のやりとりを続けていた。当時、蘇軾をとりまく一種の地下文壇とも言うべき私的な文学コミュニティーが形作られており、そのなかで彼の作品は、いわば「秘密のテクスト」として書かれ、読まれていたのである（拙論「言論統制下の文学テクスト――蘇軾の創作活動に即して」〔『大阪大学文学研究科紀要』第五十七巻〕参照）。

以上を踏まえて本発表では、罪人としての意識は蘇軾の文学活動に如何なる影を投じていたのか、詩と書簡というふたつのジャンルの関係に着目しながら若干の私見を述べてみたい。

## Ⅱ－6　王安石と「半山」

和田　英信（お茶の水女子大学）

どこに、そしていかに住まうかは、中国の士人にとって大きな関心のまとであり、それを詩や文章に描くことは、彼らの文学活動のなかに一定の位置を占めてきた。

「招隠」や「反招隠」においては、身を置く空間の選択をめぐる議論が見られ、さらに個人的な生活を文学に詠じるものとしては東晋・陶淵明の諸作品、とくに「結庵在人境、而無車馬喧」という詩句がすぐさま想起されるであろう。劉宋の謝霊運は人里離れた山中での歩みを山水詩のなかに詠じ、また始寧の山中に別荘を設け、その詳細を「山居賦」に展開した。くだって盛唐の王維は長安南郊の輞川に荘園を営み、その中に個人的な名所をしつらえてそれぞれを詩によって再現した。中唐の白居易は洛陽に広壮な園林を造営し、「中隠」を謳歌した。いずれも理想の空間を文学のことばによって写し止めることにつとめた。

北宋の王安石の号「半山」は、その晩年の折、居を構えた場所が、江寧（いまの江蘇省南京）の城市とその東北郊外の鍾山（北山、蔣山とも）とのちょうど中間にあったことに由来するという。

住まいを構えるその場所、そこでの暮らしぶり、そしてそれを作品として書きとめる行為の文学的な意味を考えてみれば、「居」の文学の系譜をたどることになるであろうし、また王安石の住まった江寧はかつて金陵とも呼ばれた古都であり、都市を詠う文学の系譜との関連から、「半山」における王安石の詩を読むことも可能であろう。

今回の発表では「半山」ということばをいとぐちにして、王安石晩年の私的空間の構築と文学営為との関わりについて、いささか探ってみようと思う。

## Ⅱ－7　黄庭堅の墨竹創作論について

蒙　顕鵬（九州大学大学院）

黄庭堅（一〇四五～一一〇五）の現存する詩一八七八首のうち竹に関する詩は一六五首と全体の一割近くを占める。その中でも墨竹を詠じた作品は合計二十首にのぼる。文同や「胸有成竹」で名高い蘇軾の墨竹については、中村茂夫氏『中国画論の展開』や横山伊勢雄氏などすでに多くの研究があるが、黄庭堅がそれをどのように受け継ぎ、発展させていったのかについては、いまだ十分な研究は行われていない。

黄庭堅は従来の一般的な墨竹画について、「少年奇を喜む」（「題宗室大年永年画」）などと批判し、老成・老熟を理想として説いた。これは彼の「奇語を作るを好むは自ら是れ文章の病なり」（「与王観復書」）の認識や、杜甫の晩年の詩歌への敬慕など、彼の後半生の文芸観と一致している。

一方、篤く禅宗を信仰した黄庭堅は、墨竹画の創作に対しても淡泊な心境を重視した。このような心境は蘇軾の「意の適はざる所有りて之を遣る所無く、故に一に墨竹に発す」（「跋文与可墨竹」）などの衝動的な創作論とは異なり、心の内が一切外界に影響されないことを理想としている。長谷川昌宏氏は論文「黄庭堅の芸術と禅」の中で絵画が禅の影響下にあることを指摘しているが、更に発表者は黄庭堅の四川左遷の交友関係や地域のつながりや、『景徳伝灯録』など書籍の引用などから、その独自性を究明してゆきたい。

## Ⅱ－8　女神信仰における「靴」の表象

川島　麻衣（東京外国語大学大学院）

中国、とりわけ華南一帯の女神信仰では、靴は女性の持つ霊力を象徴する神聖な道具としてしばしば用いられる。

例えば、中国南方に広がる媽祖信仰や福建省を中心とする臨水夫人信仰には、「請鞋」という風習がある。これは、子授けを求める女性が媽祖廟や臨水夫人廟などの女神廟を訪れて祈願した後、その神像が履いている靴を持ち帰り、霊験があれば願ほどきの参拝をすると共に、新しい靴を寄進するというものである。

「靴」を通して神仙界との繋がりを持とうとする着想は、実は明代の通俗小説中にも見られる。万暦年間に福建建陽の忠正堂から刊行された『新刊出像天妃濟世出身傳』（別名『天妃娘媽傳』）と、ほぼ同時期に同書肆から刊行されたとされる『新刻全像顕法降蛇海遊記傳』（簡称『海遊記』）では、其々ある種の移動手段としての靴が描かれている。両小説は共に福建莆田出身の女神媽祖（天妃）と、同じく福州出身の女神臨水夫人（陳靖姑）を主人公とした神怪小説であり、『天妃娘媽傳』では、林長者の娘が自らの靴を川に投げ入れ、それに乗って湄洲へ向かったと言う一段がある。また『海遊記』では、陳靖姑らが法術を学ぶべく閭山へ向かう途中、目の前に広がる川を渡る手段として靴が用いられる情節がある。ここで注目すべき点として、靴の持ち主・乗り手はいずれも女性であり、男性は除かれる事が挙げられる。

本発表では、中国の歴史の中で示されてきた靴のイメージをふまえた上で、小説中に表象される靴の機能を分析する。そして、今日の子授け祈願の儀式等を参考にしながら、女神信仰の中で靴が持つ役割と意義を論じ、女神の職能と如何なる関係にあるかを考察したい。

## Ⅱ－9　「一様的人」というセリフ―『紅楼夢』の戯曲への改作について

呉　雨彤（京都大学大学院）

小説『紅楼夢』の百二十回本が刊行された翌年（一七九二年）から、それに基づいた演劇作品が続々登場した。意外なことに、原作ではその役割の重要性にせよ、存在感にせよ、なくてはならない王熙鳳という人物については、約百年間ほぼ扱われてこなかった。その後、中国における伝統的女性教育に反した「妬婦」である王熙鳳が主役となり妻妾争いを題材とした作品が登場するが、やがて女性の嫉妬を儒教の伝統的な教えの中でとらえる傾向から脱して、そのエピソードを現代的視点から描写する作品が誕生する。これは中国におけるフェミニズム思想の発展とも深く関わっていると考える。本発表では、『紅楼二尤』、『王熙鳳大鬧寧国府』の脚本を中心として小説と比較し、戯曲改作の裏に潜む作者の意図を探りたいと思う。

小説では、「你我是一様的人」（あなたも私も同じ身分の人間ですもの）というセリフがあるが、これは尤二姐が初対面の挨拶で自分は平児と同じ身分・地位だと言っているもので、謙遜さを表す以外に特別な意味はない。しかしこの「一様的人」という言葉は、戯曲改作において作者によって異なる意味を与えられ、何度も変化した。王熙鳳のセリフとしてその謀に長けているところを強調したり、また主人の賈璉はこのセリフにより家庭内の秩序を守ろうとする努力を見せたりすることになる。後に「一様的人」は「一様的命」と変化し、「同じ薄命の者」という意味で、同じ立場の者を憐れむ平児の気持ちを描写するようになり、『紅楼夢』の女性たちの悲劇的な運命に対する作者の感嘆を一層強く感じさせる。

戯曲作者は、一つの言葉を巧みに使うことを通じて、封建社会における女性の境遇や父権家庭での妻妾の対立の核心に触れ、観客の共感を引き起こす一つの切口とした。戯曲作品は、現代的な、ヒューマニズムとフェミニズムの視点から小説を見直す役割も果たしている。

## Ⅱ－10　黄遵憲『日本雑事詩』における文体的特徴をめぐって

趙　偵宇（京都大学大学院）

黄遵憲『日本雑事詩』は七言絶句からなる詩集でありながら、歴史文献としての扱いを受けてきた。その理由は、出版当時、中国人が明治日本に対して強い興味を持っていたこと、また今日においては日中交流の研究が盛んであることにある。だからといって、『日本雑事詩』の文学性が低いというわけではない。康有為が指摘した「有詞有注，詳略互備……文用互殊，綱目列臚，可誦可娯，如遊扶桑之都」（『日本雑事詩』序）という意見は、文体の側面から評価していることが明白である。『日本雑事詩』を純粋に一詩集として評価するために、我々はこうした見方をも重視すべきではなかろうか。

「雑事詩」の先行例としては、清朝の沈嘉轍、厲鶚ら七人の合作『南宋雑事詩』が想起される。『日本雑事詩』全二〇〇首における有注の七言絶句という文体、「雑事詩」という名称のいずれから見ても、黄遵憲が先行する『南宋雑事詩』等を継承しようとする文体意識の強さが窺われる。『人境廬詩草』の「櫻花歌」、「游箱根」などの無注の長編叙事詩を見れば、黄遵憲が七言絶句以外の文体で日本の「事」を描写する能力と意思を持っていることが明白である。しかし、『日本雑事詩』には、『南宋雑事詩』とは異なる、幾つかの文体的特徴が見られる。（一）注の独立性。『日本雑事詩』の注は文献資料の引用に止まらず、風景描写や一人称により感想や経験を述べる場合があるし、注に再び注が付く場合もある。（二）詩と注との関連性の自由さ。『南宋雑事詩』は、注で示された史実に詩が従属する傾向がある。一方、『日本雑事詩』は詩と文が一体化している場合のみならず、詩は詩、文は文で独立性を保つ場合もある。（三）詩作ごとの連続性。個々の作品が分かれる場合もあるが、詩と詩、または注と注の間に繋がりがある場合もある。本研究は、『日本雑事詩』の以上のような特徴のもつ意味につき、更なる分析と論述を展開する。

## Ⅱ－11　近代知識人の古典小説観について―林語堂をてがかりに

上原　徳子（宮崎大学）

本発表は、中国古典小説に中国近代知識人がどのように接触し、それをどうとらえていたのかを、英訳という行為の検討を通じて考察することを目的とする。

林語堂（一八九五―一九七六）は、My Country and My People（『吾国与吾民』）やMoment in Peking（『京華煙雲』）で知られる作家であり、言語学者・評論家という多様な側面をも持つ人物である。彼には多くの英語著作があるがその中には中国古典の英訳も含まれる。中でも中国古典小説を英訳した有名なものに『紅楼夢』があるが、そのほかに短篇も翻訳している。その主なものとしては、一九五一年出版のWidow, Nun and Courtesanの三篇、一九五二年出版のFamous Chinese Short Storiesの二〇篇の合計二十三篇がある。これまで、個別の作品についてその翻訳技術や基づいた原本に関する研究があるが、全体を見渡した考察は多くはない。また、これらの作品に関しては多くは中国語圏において翻訳学の立場から主に英語翻訳を専門とする研究者たちによって検討されてきた。その際議論の関心は、言語間の差異から生じる問題、文化転移の問題、林語堂の長編作品との関連づけなど多岐にわたる。ただし、あくまでも翻訳学を基本とする研究のため技術的な問題に多くの字数がさかれている。本発表は、それらの研究を踏まえた上で林語堂が英語に翻訳（翻案）するために選択した短篇の古典小説を分析することを中心に、個別の作品の内容の傾向について（翻訳あるいは翻案というのがふさわしいのか）、そこに彼の古典小説批評がどう反映されているのか再検討したい。これを今私たちが中国古典小説とよんでいるものの本質を考える一つのてがかりとしたいと考えるからである。

## Ⅱ－12　一九〇六―一九一九における『留美学生月報(The Chinese Students' Monthly)』―雑誌記事にみる文化的対抗関係

黄　詩琦(京都大学大学院)

義和団事件賠償金によるアメリカへの公費派遣留学生は、中国の社会変革において不可欠な力となったと見なされる集団である。その中には、中国の近代学術を形作るのに大きな役割を果たした胡適・梅光迪らもいた。彼らが活躍し始めた一九〇九年から、胡適の帰国の影響を受けた一九一九年の新文化運動までの約十年は、アメリカ社会で「文化革命」が起きた時期と重なっている。特にアメリカ知識社会が、自らの文化の母胎であったヨーロッパとは異質の、中国と日本という極東地域に対する関心を持つようになったことは注意される。この時期の在米中国人留学生たちの動向をよく示すのが、一九〇六年に創刊された『留美学生月報(The Chinese Students' Monthly)』である。英語で執筆されたこの雑誌は、当時の中国の現状をより正確にアメリカに伝達しようとしていた。このような「中国情報」報道は、一九一一年の辛亥革命の勃発、一九一二年の中華民国成立を経て、中国が新しい段階を迎えた後にも続けられた。ただし、編集者交代などの要素も含め、中国国内の政治的環境の劇変による言論の自由化などの原因により、雑誌の内容と風格は大きく変わっている。また、一九一四年に、中国人留学生たちはさらに『留美学生季報』を発行し、中国知識社会にアメリカおよび西洋の新しい知識を中国語で紹介することを目指した。

本発表は、当時のアメリカの社会状況と主流文化のありかたも『月報』創刊の一背景だととらえるとともに、中国国内の状況と編集者の交代による方針変更が雑誌の内容と風格に与えた影響をも検討する。母国の政治・経済・文化などの領域における現状と進展を取り上げた記事の内容そのものだけでなく、英文のスタイル、書き手の姿勢など多様な特徴に注目する。これにより、中国人留学生からなる執筆者群が、帰国後に中国において手腕を発揮するまでの助走期間中、アメリカでなにをしていたかの状況を明らかにすることをめざす。

## Ⅱ－13　女性は如何に女性を演じたか―一九一二年から一九二〇年の北京の演劇評論誌における性別と演技の批評

呉　宛怡（香港理工大学）

一九一二年以降、中国伝統演劇における女性俳優への禁令が解かれ、女性俳優も正式に演劇の舞台に登場するようになった。その後、政府当局が男女共演を禁じる政策を採ったため、女性俳優による演劇も徐々に盛んになった。それまで北京の演劇界では男性俳優がその中核を担っていたため、中華民国初期より現れ始めた女性俳優が如何に男性俳優と競い合い、本来男性俳優が独占していた演劇技法を掌握して観衆の評価を得てきたかを考察することは意義深いテーマであると言える。当時の女性俳優の役柄とその演技についての研究は、その多くが女性俳優による男性役としての演技の研究に集中しており、女性役について考察したものは少ない。

本発表では、一九一二年から一九二〇年の演劇評論誌の批評を端緒とし、男性俳優の評論に特化していた演劇評論家が、女性役を演じる女性俳優の演劇技法をどのような方針をもって評価したかを調査し、その評論から性別と演技の間に生ずる影響や相互関係を考察し、それにより当時の女性俳優が「女性」役としての演技を如何に模索し、試行錯誤してきたかを明らかにしたい。更に、本発表では舞台で演じられる賢妻、慈母、淑女、妖婦等の人物に表される様々な「女性」のイメージについて、民国初期の男女平等や自由な婚姻等、新しい時代の価値観が台頭する中で、女性俳優が如何に新しい解釈による表現を試みたか、またこれらの「女性」のイメージが表す文化的意味合いについて論述する。

## Ⅱ－14　九州大学附属図書館濱文庫蔵の冰心『春水』手稿本について

中里見　敬（九州大学）

九州大学附属図書館濱文庫（中国演劇研究者・濱一衛〔一九〇九～一九八四〕の旧蔵書）には冰心の詩集『春水』の手稿本が所蔵されている。昨年公開された「一九三九年周作人日記」（『中国現代文学研究叢刊』二〇一六年第十一期）に「下午又整理旧報、得《春水》原稿、擬訂以贈濱君」との記述が見つかり、その内容が『春水』手稿本の周作人題記と一致することから、これが一九三九年に周作人から濱一衛に贈られたものであることが判明した。さらに、一九二三年に詩集『春水』が新潮社文芸叢書の第一冊として刊行された際、周作人がその主編を務めていたこと、またその筆跡から、この手稿本が冰心自身によるものであることが確実となった。これらについては、第一報として中国の学術誌『中国現代文学研究叢刊』二〇一七年第六期に「冰心手稿藏身日本九州大学・《春水》手稿、周作人、濱一衛及其他」を寄稿した。

今回の発表では、

一、九州大学附属図書館濱文庫所蔵冰心『春水』手稿本の概要
二、冰心『春水』手稿本が、周作人を経て、濱一衛に贈られた経緯
三、『春水』手稿本と通行本の比較・異同
四、周作人および濱一衛の遺族が保管する未公開の資料

の四点にわたって紹介したい。一、二は前稿と重複するが、ご了承いただきたい。三、四が今回新たに調査した内容である。

『春水』手稿本は現存する冰心の原稿として最も早い時期の自筆完全原稿であり、冰心研究、中国現代文学研究、とりわけ一九二〇年代に流行した新詩の研究における新資料として、高い文学史的価値を有する。さらに冰心の書として芸術的にも貴重である。周作人と冰心、濱一衛の師弟関係、日中文化交流の一幕を証する資料として、長く大切に保管されることを期待したい。

## Ⅱ－15　穆時英における作風の転換と堀口大學

福長　悠（東北大学大学院）

一九三〇年代の上海文壇で活躍した作家、穆時英（一九一二～一九四〇）は、文壇に登場した当初は下層の民衆を描く作風で名を挙げたが、まもなくモダン都市上海を舞台にプチブル階級の歓楽を描く作風に舵を切り、「中国新感覚派の聖手」の名で呼ばれた。

本発表では、穆時英の小説における男女関係を描く場面において、堀口大學の詩がいかに引用されているかに着目することで、作風の変遷を明らかにすることを試みる。穆時英は一九三一年に発表した短編小説「南北極」において、作中人物の口から堀口大學の詩句を語らせている。「南北極」の主人公は人力車夫や用心棒などの職を転々とした下層の民衆であり、堀口大學の詩を引用するブルジョワ階級の青年に反感を抱く。また、穆時英が同じく三一年に発表した「被當作消遣品的男子」（退屈しのぎのための男）では、主人公と恋愛遊戯を演じる女性、蓉子が好きな文学者として横光利一や堀口大學の名前を挙げる。従来の研究において、蓉子が横光利一および堀口大學の名を挙げたことは、穆時英が日本の新感覚派へ傾倒していることを示すととらえられてきた。蓉子は最終的に男性主人公を「消遣品」（退屈しのぎのための品）として捨ててしまう。男性主人公が恋愛の主導権を握ることができないというプロット上の特徴は、先行研究でもたびたび指摘されてきた。

女性がモダン都市を象徴し、男性主人公が恋愛の主導権を握れないという構図は、作風の転換の前後ともにみられる。転換の前後における堀口大學への言及は、男性主人公が都市に対して抱く興味と反感の相半ばした複雑な感情をそのまま映し出している。穆時英自身はブルジョワ階級の出身であり、下層民を主人公に小説を書いた理由は、長らく議論の対象になってきた。しかし、以上から、穆時英は、都市と女性に対する愛情と恐怖の感情を、下層民がブルジョワ階級に対して抱く羨望と恐怖の感情に置き換えていると考えられる。

## Ⅲ－1　清原家『孝経』抄物にみえる注釈の多様性―開宗明義章「至徳要道」の注釈を例に

石丸　羽菜（名古屋大学大学院）

『孝経』の日本への伝来は古く、大宝二年（七〇二）の大宝律令にその書名がみられる。下って中世では、当時の儒学の権威であった明経博士家の清原氏が用いた『古文孝経孔安国伝』がよく読まれた。それでは、清原家の人々は『孝経』をどのように理解していたのか。これを知るために、清原家の人々の講義に関する記述を載せる抄物は有力な資料といえる。

清原家の『孝経』抄物の諸系統については、阿部隆一氏の「室町時代邦人撰述孝経注釈書考」（『大倉山論集』八、一九六〇年。のち慶應義塾大学斯道文庫編『阿部隆一遺稿集二』解題篇一所収、汲古書院、一九八五年）が最も詳しい。ただし阿部氏は書誌学的な考察を主としており、各系統に個性を認めるものの、注釈内容については「現存の清家講説本がすべて根本に於ては文体に至るまで判を捺した如く、宣賢のそれと殆ど同一で、その時々の受講者の聞書によって、細部に至つての省略の差、文辞詞章を見る異本を派生せしめておる」（前掲の阿部氏論文二三三頁）と言う。総体的には阿部氏の指摘通りであるが、発表者が各系統間の注釈の差異を確認したところ、『孝経』全体の約八割に存在していた。この異なりはどのようであり、何に由来するのか。中世日本における『孝経』受容という観点から、再考の余地があるように思われる。

本発表では、『古文孝経孔伝』開宗明義章「至徳要道」とその孔伝に対する清原家の抄物の注釈に着目する。該当部分に対する注釈は、考察対象とする五系統のうち、抄物独自の注釈は三種が確認され、そこには仏教的、朱子学的な要素がみられる。これについて、他系統の『孝経』抄物や『孝経』以外の抄物にみえる関連注釈をたどることで、こうした注釈がなされた背景について考察する。以上の過程によって同一漢籍に対する抄物にも多様な注釈が見出されることを示すとともに、当時の儒書理解の一方式についても卑見を呈してみたい。

## Ⅲ－２　山鹿素行の「主静」批判―佐藤直方との比較を通して

石橋　賢太（中央大学）

山鹿素行（一六二二～一六八五）は、日本における朱子学批判の嚆矢として知られている。そのため、従来の研究では朱子との比較をされることが多かった。だが、素行の言葉を仔細に見ていくと、素行の批判の対象が朱子その人というよりは、朱子に先行する周濂溪に向けられていることが見て取れる。したがって、従来は朱子学批判だと見られていた素行の言説は、周濂溪への批判として読み直す必要があるのである。

このような観点に立って素行の思想を捉え直したとき、近世儒学史における素行の位置づけはどのように変化するのか。この点を明確にするために本発表では、崎門派の儒者佐藤直方（一六五〇～一七一九）との比較を行う。直方と比較するのは、直方が周濂溪を朱子と並んで高く評価したからである。この面では、朱子と周濂溪との違いを分析的に捉え、周濂溪をより強く批判した素行と対照的である。

両者を比較するに際し、本発表では周濂溪のいう「主静」に対する言説を取上げる。「主静」について、素行は「後學聖人の道を以て異端の工夫を為すの弊、因つて起る所なり」（『山鹿語類』巻第四十三）ときわめて厳しく批判している。これに対し、直方は「学問の根基は主静存養なり」（『敬説筆記』）と最大限の賛辞を送っている。「主静」に対する評価において、両者の違いは顕著である。したがって、「主静」をめぐる言説を見ていくことで、両者の周濂溪に対する認識の違いも浮彫りになると考えられる。

本発表ではこのような比較を通して、素行の考え方をより明確にし、素行の思想のあらたな位置づけを考えていく。

## Ⅲ－3　伊藤東涯の『周易伝義考異』について―その卦変説を例証として

廖　海華（北海道大学大学院）

伊藤東涯の著作『周易経翼通解』は、「漢文大系」に収められ、よく読まれている書物である。この『通解』に随所見える独特な易解釈のうち、よく問題になるのはその卦変説である。先行研究によると、卦変説に関して東涯の著作『卦変考』と『通解』を比較してみると、両者の間には大きな差異がある。これは東涯自身の混乱や齟齬と見なされている。しかし、早年の『卦変考』と晩年の『通解』のほかに、東涯にはもう一つ重要な著作がある。つまり、『周易伝義考異』という東涯が人生に亘って書き留めた厖大な読易筆記である。その著作を無視してはいけない。

そこで、『考異』の性質について文献学調査を行った。早稲田大学図書館所蔵の佐々木写本、天理大学図書館古義堂文庫所蔵の東所写本、古義堂文庫所蔵の東涯手沢本『易経集註』の三つの文献を比較した。『集註』の上欄にある東涯の書入れを集めてできたのが東所写本の『考異』である。佐々木写本は、東所写本の写しであり、その文字、特にその中に細かく記入されている「考異」各条の執筆年月日の信憑性も極めて高い。

次に、『考異』と『通解』との関係を分析する。『通解』の東所序には、『考異』の撰述は『通解』の準備であると説く所があるが、両者の内容を比較してみると、東所の説を明確に裏付けられる。つまり、『考異』は『通解』の草稿の一部と見てよい。『通解』にはまだ結論が示され、『考異』にはその結論に至るまでの詳しい考察の過程が記載されていることが多い。

最後に、『考異』・『卦変考』・『通解』三書の卦変説を比較してみると、東涯の基本的な考え方は変わらないが、細部については何度も自分の説を調整していることが分かる。『考異』によって、その調整の過程が分かれば、いわゆる「混乱や齟齬」はほとんどないと見なせる。

## Ⅲ－4　荻生徂徠の訓点資料における助字についての考察―「而」の訓読法を中心に

王　侃良（名古屋大学大学院）

荻生徂徠（一六六六～一七二八）は、漢文直読を主張し、訓読を否定したとして知られている。一般的に徂徠の著書はほぼ無訓であると考えられているが、実際には訓点を付したものが残されている。一方、江戸時代における訓読法の変遷について、その分岐点には、徂徠の高弟である太宰春台（一六八〇～一七四七）の春台点の登場が関係していることがわかっているが、徂徠とどのような繋がりがあるのかに関する研究はまだ少ないと思われる。本発表では、『六諭衍義』をはじめとする徂徠の訓読資料を取り上げ、そこでの助字「而」の訓読法を調査し、春台点など江戸時代の各訓点と対照して考察した。

その結果、「而」の訓読法について、徂徠の『訓訳示蒙』を参照したところ、徂徠は古代中国語における文法（修辞）の「軽・重」という基準によって「置き字」かどうかを判断し、また「置き字」でない場合「而」字に「雖」の意味があるかないかを考えて、「ナレドモ」、「シカモ」などのように施点したことが窺われた。このような実際の訓点の面から見ると、徂徠の訓読（翻訳）観によって徂徠点という独特な訓み方があり、また太宰春台（春台点）に深く影響を与えたことがわかる。

荻生徂徠の訓点資料におけるほかの訓読法、そしてこのような訓点の付し方と中国語との関係については今後の考察課題とした。

## Ⅲ－5　野村篁園の「雅詞」について―江戸時代における填詞受容の一側面

陳　竺慧（早稲田大学大学院）

「填詞」とは、「詞牌」という予め決まった曲調とそれに合わせて言葉を選び、譜面通りに「詞」を「填」めていくことによって産み出される文体である。従って、填詞には詞牌ごとに近体詩以上に細かい韻律の規定が定められている。日本では古くから漢詩文が盛んに作られているが、そのこともあってであろう、歴代、填詞に挑む作者は稀であった。

野村篁園（一七七五―一八四三）は江戸幕府の最高学府であった昌平黌（昌平坂学問所）に務めた儒者である。絶句、律詩から排律、古体詩、駢賦などさまざまな形式にわたって多作しているが、填詞についても百六十六首もの作品を残している。その数は江戸時代以前においては異例と言えるほど多く、「江戸時代に出た最大の填詞作家である」（神田喜一郎『日本における中国文学Ⅰ――日本填詞史話　上――』二玄社、一九六五年）とも称される。そうであるにもかかわらず、篁園の填詞についてこれまで本格的な研究がなされないままに過ぎてきている。

篁園の填詞における最大の特徴は、「雅詞」と分類される作品群の詞風である。ここでいう「雅詞」とは姜夔を始め、史達祖、呉文英、王沂孫、張炎などいわゆる「雅詞派」と称される南宋の詞人たちによって作られた、音楽との調和を重視し、洗練された言葉を用いる「雅正」な詞風を指す。こうした詞風は、よく知られる同時代の田能村竹田（一七七七―一八三五）が目指した「清軽（ママ）くして、悽惋豔麗」（竹田が編纂した『填詞図譜』）な填詞とはまったく相反するといって良いだろう。

以上のことを踏まえて、本発表では篁園の填詞について、篁園がどのように清の詞論に影響されて南宋の雅詞に傾倒していったのかを考察し、篁園がなぜ「雅詞」を作ることに挑戦したのかを探ることで、填詞という文体の江戸時代における受容のもう一つの側面を明らかにしたい。

## Ⅲ－6　原采蘋の漢詩における時間意識

柯　明（早稲田大学大学院）

江戸時代には、漢詩を作り詩集を残した優れた女性漢詩人が幾人か現れ、それぞれに特色のある詩を作ったが、その多くは花鳥風月を詠むことを好み、いわゆる閨秀詩人の域に属する詩人たちであった。その中で、原采蘋（一七九八～一八五九）は当時には極めて珍しく、ほぼ全生涯を通して日本各地を遍歴しながら詩を作った。これまで原采蘋の研究はおおむねその伝記研究や九州の郷土詩人としてのものにとどまっており、詩作品そのものに対する考察は甚だ乏しかった。筆者はこれまで、彼女の詩作における遊歴の感覚に溢れた詩語・景物表現などを取り上げて考察を試みたことがある（「原采蘋の『采蘋詩集』における植物描写から見る遊歴の感覚」『江戸風雅』第十四号所収）が、今回の発表では、采蘋の詩における核心ともいえる時間表現とそれに反映されている彼女の時間意識について論じる。

采蘋の詩作には明確な時間表現が数多く見られ、全詩篇の中で特別大きな比重を占めている。これは男女を問わず同時代の江戸期の詩人の中においては、非常に特徴的なことであるばかりでなく、中国清代の女性詩人の作品と比べても、その多用は際立っており、采蘋文学の独自性を形成する部分である。それは彼女の旅の実体験と深く関わっていると思われるので、その生涯の歩みに即して考察する。

本発表では、采蘋の詩作品そのものに着目し、特徴的に見られる時間表現を取り上げて、なぜ彼女が時間表現を多用したのか、彼女が時間をどのように意識し、それを詩作にどのように活かしているのかについて明らかにしたい。

## Ⅲ－7　青木正児の京劇観

李　莉薇（華南師範大学）

一九一九年、中国でもっとも人気のある俳優梅蘭芳が初めて日本へ渡航し、一ヶ月ほど公演を行った。梅蘭芳の帰国後、狩野直喜、内藤湖南、浜田耕作、鈴木虎雄、青木正児など「京都学派」名学者揃いの評論集『品梅記』（一九一九）が出版され、中日にも注目されていた。中には中国戯曲研究専門家としての青木正児の『梅郎と崑曲』という文章が見られる。青木氏は梅蘭芳の演出を見なかったにもかかわらず、梅蘭芳の芸や「崑曲」「皮黄」の文学上、芸術上における優劣を論じ、さらに文芸史全体から見れば現代の中国劇はその衰頽期にあると指摘した。この文章から、青木氏の当世流行の「皮黄」を捨て「崑曲」を取るという中国演劇観を窺うことができる。

ほぼ十年後、青木氏が戯曲研究の集大成である『支那近世演劇史』（一九三〇）を上梓。同書において、氏は中国演劇の史的発展の視点から、再び「皮黄」「崑曲」の歴史地位並びに二者の文学上、芸術上における価値を議論した。

上述した二作をよく分析すると、青木氏の「皮黄」「崑曲」に対する認識には一貫したものもあれば、ある程度の変化も見られる。特に演劇進歩を論ずるに当たって、崑曲より皮黄調の老生戯の佳なる者が多く、崑曲は皮黄調に一籌を輸するという見方は正に一九三〇年代青木氏の「皮黄」「崑曲」再認識と言えよう。

何故このような変化が生じたのか。名古屋大学附属図書館「青木文庫」所蔵の図書、レコード、戯単、版画画集などの演劇研究資料を詳細に分析することにより、一九二〇年代青木の前後三回の中国留学が氏の中国演劇研究に大きな影響を与えたということが分かった。青木氏が中国留学した時、どんな演劇をみたのか、どんな劇場へ足を運んだのか、どんな人に会ったのか、そして、二年間ほどの中国滞在が氏の中国演劇研究にいかにして影響をもたらしたのか、本発表では青木氏の論著を熟読した上で、当時の中国学との関係を再考することにより明らかにしたい。

## 第四部会（Ⅳパネルディスカッション）（次世代シンポジウム）

### 表象文化研究の試み―中国映画研究のおもしろさ

○松村　茂樹（大妻女子大学）
蓋　曉星（関東学院大学非常勤講師）
徐　子怡（東京理科大学非常勤講師）

本学会研究推進・国際交流委員会では、第四の部会として「表象文化部会」の創設を提案している。今回、そのアピールの一環として、パネルディスカッション「表象文化研究の試み―中国映画研究のおもしろさ」を行う。

中国の学問は広範な領域を包含しており、これまでに立てられて来た領域にすっぽりとは収まらない分野、また、時代の流れの中で新たに生まれた分野がある。こういった分野を「表象文化部会」で生かしたい。そして今回、新分野の代表的存在で、パネル代表者（松村）なども文人研究と兼ねて行って来た映画研究を取り上げ、そのおもしろさをアピールすることにより、中国研究をやってみよう、日本中国学会に入ってみようと思ってくださる方を増やせればと考える。

中国の学問には、中国を動かす大きな力がある。時には儒教や道家思想が、時には辞賦や詩詞が中国を動かして来た。その力を映画も持っているのではあるまいか。中国映画研究は、そういったダイナミズムの中に分け入って行く魅力をこれまでの学問同様に有しながら、映像や音声からイメージの分析も可能な、奥深さと幅広さを具えた研究分野である。

今回、三名のパネリストが、各々の研究を紹介しつつ、こんな発見があった、こんな課題が生まれたといったことを発表することにより、中国映画研究のおもしろさを伝えたい。なお、司会は、本委員会の宇佐美文理委員長にお願いする。

○松村茂樹「現代中国映画におけるレジェンドへの回帰と反発」
　陳凱歌監督・張芸謀撮影の『黄色い大地』（一九八四）は、改革開放が保守派の牽制を受ける中、その推進を求めた作と見ることができる。そして、テーマをイメージカラーでより鮮明にするという画期的手法により、この映画はレジェンドとなった。その後、これに回帰したり、反発したりする映画が出てくる。これらを紹介しながら、中国映画におけるレジェンドについて考えたい。
○蓋暁星「『日本における中国映画の受容』に関する研究及び今後の展開」
　「日本における中国映画の受容」というテーマで制作年代（一九五〇年代以後）やジャンルごとに行ってきた研究について報告し、今後のテーマを探る。例えば、「中国映画における女子大生の宿舎文化」という論文において分析した、中国映画特有の舞台装置といえる「（大学の）宿舎」が創出した物語の構成要素、またそこで描かれた女子大生像について発表したい。
○徐子怡「中国における村上春樹作の小説と映画についての受容」
　二〇一〇年までに村上作品から改編された映画は七作ある。そのうち、最初の『風の歌を聴け』（一九八一）と最後の『ノルウェイの森』（二〇一〇）以外は全て短編作品を原作としたものである。村上文学において、長編を重視する中国の読者にとって、その原作が映像化されると、評価は逆転することが生じる。これらの内容を紹介しつつ、原作小説の受容と比べながら、村上文学から改編される映画について中国における受容を考えたい。

## 山形大学附属博物館・小白川図書館　共催　日本中国学会第六十九回大会準備会　後援

## 特別展「沖縄と山形をつないだ琉球漢詩文」

**会期　二〇一七年十月六日(金)～十一月十四日(火)**

今回の特別展では、旧林泉文庫所蔵の琉球・沖縄の漢詩文と関係する資料を展示し、近代以降、最後の米沢藩主上杉茂憲(もちのり)と伊佐早謙(いさはやけん)がつないだ沖縄と山形との深い結びつきを紹介する。林泉文庫は、近代山形の郷土史家の先駆け伊佐早(一八五七～一九三〇)が収集した米沢藩関係の書籍と古文書、および和漢の古典籍からなる一大コレクションである。

伊佐早は、幕末に米沢藩士の家に生まれた。藩校興譲館の提学片山一貫(弦斎)の門に入り漢学を修め、漢詩文にも造詣があった。若くして藩主や藩士の絶句を蒐集した『鶴城詩集』を編纂出版した。晩年には、自らの漢詩を収めた『樅軒稿』や『恩栄紀詩』を残している。また上杉家記録編纂所総裁を委嘱された伊佐早は、『奥羽編年史料』『鷹山公遺事』『編年子爵上杉家記』などを執筆したことでも知られている。

さらに米沢の各界に働きかけて、一九〇八(明治四十一)年「財団法人米沢図書館」(市立米沢図書館の前身)設立に尽力した。翌年十月に開館し、これにより興譲館の図書が散逸することなく引き継がれたのは稀有のことで、いわゆる「米沢善本」の守り人でもあった。一九一二(大正元)年から亡くなる直前まで、第二代館長として引き続き貴重書の蒐集に努めるなど、図書館人としての貢献も特筆に価するものがある。

本学所蔵の旧林泉文庫に貴重な琉球・沖縄関係資料がまとまって存在することに最初に注目したのは、うるま市中央図書館の栄野川敦館長や鹿児島大学の高津孝教授たちであった。同市教育委員会が蔡大鼎『伊計村遊草』等調査研究事業を進める中

で、二〇一三（平成二十五）年二度にわたって来館し、約二八点にのぼる関係資料の存在を明らかにした。今回の展示では、その貴重な研究成果を利用させていただく予定である。

旧林泉文庫に収められた関係資料には、漢詩人で「琉球処分」後に救国運動に奔走した蔡大鼎や林世功に関係する書籍が数多く含まれている。久米村の士族で、清国への朝貢業務に関わっていた家柄の蔡大鼎、それに父徳懋や弟大受、叔父徳昌などが所持していた鈔本である。たとえば、福建の欽思堂で出版された大鼎撰『北燕游草』や『呈文集』（大鼎旧蔵）、『官生鄭孝徳詩文集』（徳懋旧蔵）、『意山堂詩集』（大受旧蔵）、『琉球正使毛國棟詩』（徳昌旧蔵）などは、おそらく蔡氏の関係者から一括して入手したものと推察される。また琉球の分島・改約案に抗議し自決した林世功の関係では、『林世功遺稿』や『呈文』（世功旧蔵）などがある。

このたび、日本中国学会が本学で開催されるのに合わせて、小白川図書館所蔵の琉球・沖縄関係漢詩文を初めて公開することとなった。この場を借りて特別展開催にあたって後援していただいた同準備会に謝意を述べたい。

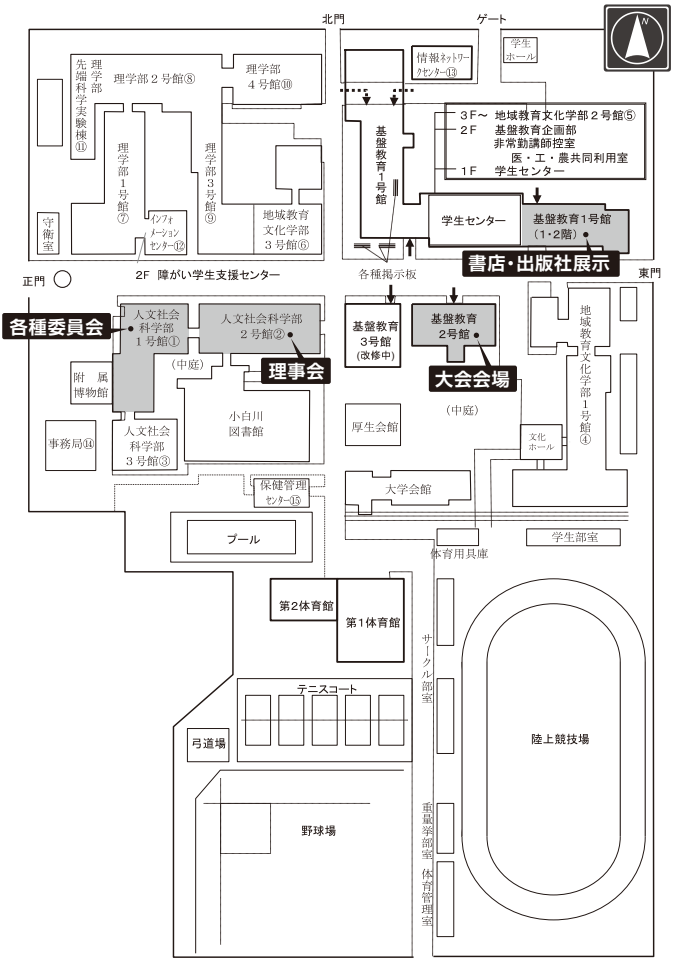
斯界の専門家が一同に会するこの機会に、特別展をご高覧いただき専門的立場から多くのご示教を得られれば幸いである。

URL: http://www.lib.yamagata-u.ac.jp/museum/gazou/kanpou/

山形大学附属博物館館報43

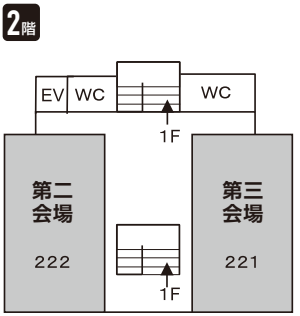
山形大学
Yamagata University

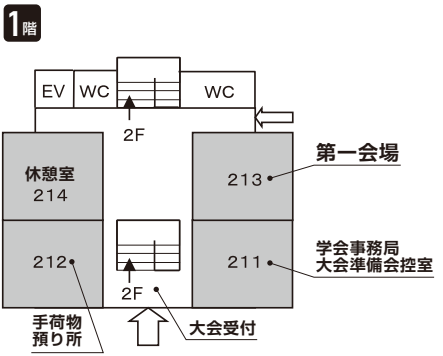
# 大会案内図（小白川キャンパス）



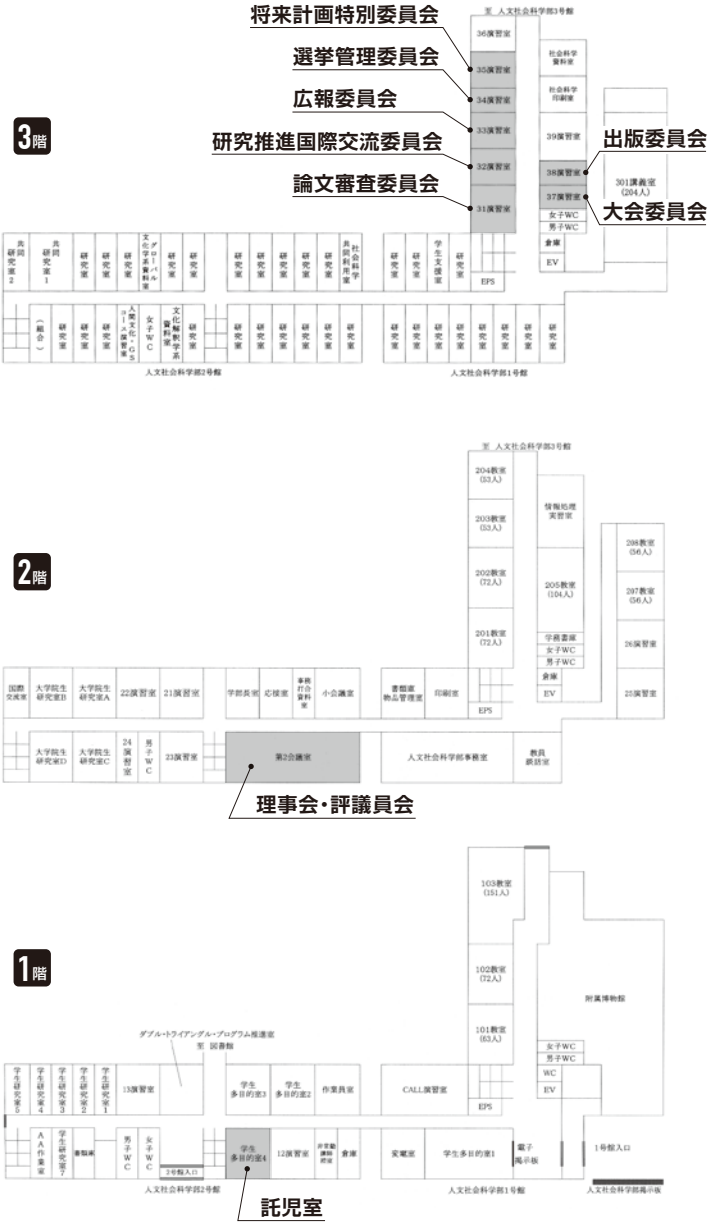
# 大会会場案内図（基盤教育棟）

## 基盤教育　2号館



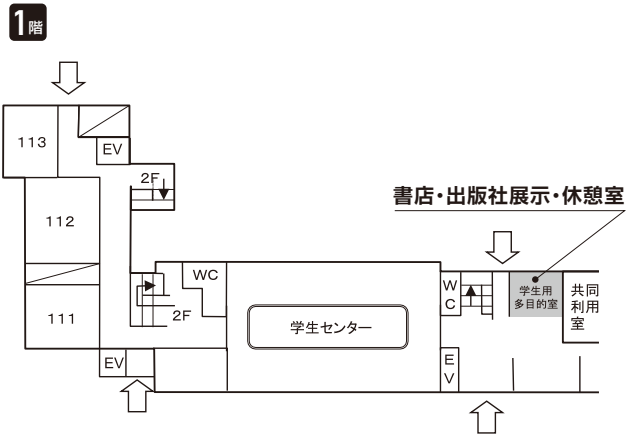
# 大会会場案内図（人文社会科学部棟）



# 大会会場案内図（基盤教育棟）

## 基盤教育　1号館

（地域教育文化学部2号館）



## 7．申し込み方法

メールにての受付となります。(hsu@human.kj.yamagata-u.ac.jp)
振込用紙でのお申し込みは受け付けておりません。

メールに、①託児希望日時、②託児希望人数(年齢)、③申込者氏名、④連絡先を記載し、下記担当者までお申し込み下さい。折り返し、必要書類等を添付ファイルにてお送りします。

申し込み期限は、９月２７日(水)です。なお、保育可能人数を超えた場合は、お断りすることがあります。

## 8．予約の変更

担当者まで速やかにご連絡ください。当日の急な発病によるキャンセル、時間変更など、できる限り対応します。

## 9．当日の諸注意

a)受付

大会受付で託児室利用の旨をお申し出ください。料金のお支払いをいただいた後、託児場所にご案内します。

b)お持ち物

①保護者の身元が確認できるもの(パスポート、運転免許証、健康保険証、母子手帳など)

②託児カード(ご記入の上、託児初日にご持参ください)

③託児に普段使用している物(オムツ、着替え、タオル等)お昼休みに必要な飲み物、お弁当などは保護者の方が準備、管理下さい。

※託児時間中のおやつ、飲み物(麦茶)、おもちゃは、やまがた育児サークルランドが用意しますので、アレルギーがあるお子さんは申込時にお知らせください。

c)お迎え

原則としてお預けと同じ方でお願いします。①の身元証明をご提示ください。

d)熱がある場合、体調不良の場合などはお預かりできないことがあります。

※その他、やまがた育児サークルランドからの「お願い～お預けになる保護者の皆様へ」(申し込まれた方に送信致します)も併せてご確認願います。

## 10. お問合せ先(託児申し込み先)

託児担当係メールアドレス：hsu@human.kj.yamagata-u.ac.jp

※ご不明の点はご遠慮なく大会準備会までお問合せください。

# 託児室のご案内

今大会では、下記の要領で臨時託児室を開設いたします。託児を希望される会員は、以下の要領に従ってお申し込みください。

## 1. 依頼先

本大会準備会は特定非営利活動法人に保育を依頼します。
特定非営利活動法人　やまがた育児サークルランド
〒990-0042　山形市七日町１－１－１　Ｎ－ＧＡＴＥ
保育者２名で保育できる人数までのお預かりになります。

## 2. ご利用資格

本大会に参加される会員で、一歳から未就学児までのお子さまをお持ちの保護者。

## 3. 臨時託児室開設時間

１０月７日(土)　９:３０～１８:００
(昼休み11:40～13:20)
１０月８日(日)　９:３０～１６:００
(昼休み12:00～13:00)
なお、昼休み時間にはお預かりできません。

## 4. 開設場所

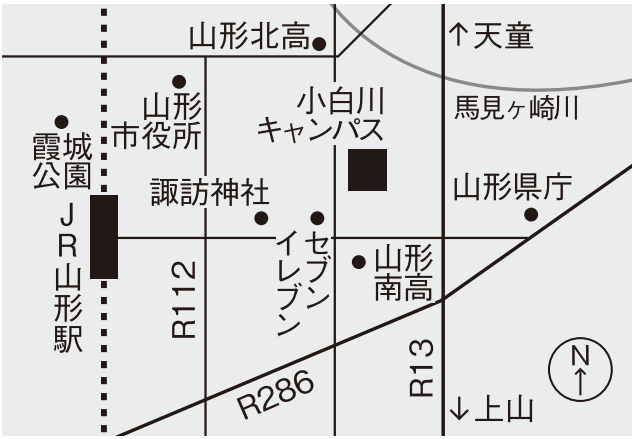
山形大学小白川キャンパス内に開設します。当日の受付時にご案内いたします。

## 5. 料金

半日(午前のみ、または午後のみ)　:1,５００円
全日　:3,０００円
※当日、受付にてお支払い下さい。

## 6. 保険

万が一の事故に備えて、やまがた育児サークルランドが、財団法人女性労働協会「グループ総合補償保険」に加入しています。補償については、財団法人女性労働協会「グループ総合補償保険」の範囲内となります。なお、日本中国学会及び山形大学は事故等に対する責任を負いかねます。




〈大会会場〉山形大学小白川キャンパス

【JR山形駅から】

○山形駅東口から東方2㎞、徒歩約25分

○山形駅東口バスターミナルから「ベニちゃんバス東くるりん（東原町先回りコース）」に乗り「東－5山大前」下車（約10分）

○山形駅東口バスターミナルから「宝沢・関沢行きバス」に乗り「小白川1丁目」下車（約10分）　小白川キャンパスまで徒歩7分

○山形駅東口バスターミナルから「県庁行きバス」に乗り「南高前」下車（約五分）　小白川キャンパスまで徒歩約7分

○山形駅東口タクシープールからタクシーで「山形大学小白川キャンパス正門」まで（約5分）

【仙台駅から】

○仙台駅前から「山形行き」高速バスに乗り「南高前」下車（約55分）小白川キャンパスまで徒歩約7分

○仙台駅から「仙山線山形行き」に乗り「山形駅」下車（約90分）山形駅から上記経路

【山形空港から】

○「山形駅行き」シャトルバスに乗り「南高前」下車（約30分）小白川キャンパスまで徒歩約7分

〈懇親会会場〉山形国際ホテル6階スプレンダー

〒990-0039 山形市香澄町三丁目4番5号　TEL023-633-3318

〒990-8560　山形県山形市小白川町一丁目4-12
山形大学　人文社会科学部　西上勝研究室内

**日本中国学会第69回大会準備会**

TEL／FAX　023(628)4813
E-mail　masaru@human.kj.yamagata-u.ac.jp